

Wilfried Gottschalch: Strukturveränderungen der Gesellschaft und politisches Handeln in der Lehre von Rudolf Hilferding. Berlin, 1962.

(Sozialwissenschaftliche Schriftenreihe der Wirtschafts- und Sozialwissenschaftlichen Fakultät der Freien Universität Berlin. Soziologische Abhandlungen Heft 3)

米川紀生

はじめに

一九六七年には『資本論』一〇〇年、『帝国主義論』五〇年記念のフェスティヴァルの研究の氾濫をみた。かかる研究動向とムードからは Hilferding は忘れ去られたのであろうか。

彼はマルクス主義の理論がドイツ社会民主党内部で、Marx・Engels の著作の弁護論的解釈として栄えた時点で思考形成過程にあり、硬直化したこの理論を創造的に発展させる仕事を積極的に遂行したオーストリア・マルクス主義の一翼であった。硬直化した passive な SPD. に対するオーストリア・マルクス主義の Aktivität のコンテラヌム。後者に結集した人々 (Max Adler, Karl Renner, Otto Bauer, Rudolf Hilferding) の利害関心は、母国オーストリアを、ドイツとイギリスとの対抗関

係にある世界史の発展段階に立ってどのような成長発展させてゆくかの具体的政策提言をめぐる理論的武器の研澄ましの中に存した。そこに民族問題の入り込む要素もあった。だが彼等の理論が具体的にオーストリア及びドイツで歴史的检测を受ける中でどのような変容ならびに帰結をもたらしたであろうか。ここに従来等閑視されてきたオーストリア・マルクス主義の独自の興味ある研究領域がある。

ともあれ、ウィーンの自由な空気に慣れ親しんだ上記人物中で、Hilferding はその行動がその後ドイツ社会党の中央派に接近し、社会党の内部で活躍するのであった。その意味で Hilferding の思考と理論は一九〇〇〜三〇年代のドイツ社会党との密接な関連の下に究明する必要がある。従来 Hilferding 研究の『Böhm-Bawerks Marx-Kritik』と『Das Finanzkapital』の個々の分野の批判検討に急のあまり、Hilferding の全体像は Oelbner の言う「流通主義的偏向」という視点で簡単に切り捨て去られてしまった。そこでは経済学的にのみ Hilferding は研究対象とされた。それでは第一次大戦以降の彼の変化に富んだ政治的行動をも解明しきれないだろうし、彼の政治と経済との相互関係をも真に把握されえないだろう。

Gottschalch の研究は、以上の固定化した Hilferding 研究ならびに Hilferding 像を再検討しとりわけ彼の政治活動との関連で Hilferding 理論の有効性を問うた新しい Hilferding 研究である。なお本書のより忠実なる紹介が今野登氏によって既になされている(西ドイツにおけるヒルファーディング研

究」——一つの紹介——『武蔵野大学論集』、第一三卷第一・二号一九六五年六月。以下に評者は本書の内容を簡単にトレースし若干のコメントを付す。

## 二 本書の構成と内容

第一章伝記的序説。第二章マルクス主義の若干の核心思想に關する付説。第三章第一次世界大戦前のドイツ社会民主党における方針論争と Hilferding の立場。第四章『金融資本論』における帝国主義の問題。第五章「完成されない革命」の時期におけるドイツ労働運動内部での諸論議における Hilferding の位置。第六章「組織された資本主義」における社会民主党の道に於ける Hilferding。第七章国民社会主義による挑戦に対する Hilferding の返答。第八章マルクス主義歴史観の修正に於ける Hilferding の断片。第九章総合的結語。本書の主要部は三〜八章で、一〜二章はその予備的考察である。主要部は内容的に三分されうる。(1)金融資本の分析(一九〇二〜一九一九年)——三〜四章。(2)組織された資本主義の研究(一九一九〜一九三三年)——五〜六章。(3)国民社会主義の支配の諸事実の上で民主主義的社会主義に結果として生じている諸問題の取扱(一九三三〜一九四一年)——七〜八章。

## 三 Hilferding の理論的活動の第一段階

社会主義鎮圧法下の SPD は、それ以後一九三三年迄 SPD の政策として特色づけられた、理論における公然たる急進主義

と実践における社会政策的改良主義を生起させた。同法の崩壊後は社民党の行動は一路議會での行動へと走った。ここに修正主義者、左翼急進派、中央派は相互対立を激化させた。その中で Hilferding は党中央派の崩壊論(遠き将来における資本主義の崩壊)も左翼急進派の崩壊論(近い将来における資本主義の崩壊)も否定して修正主義者と同意見に立ち、ドイツ労働運動が革命的实践をやるほど成熟しているか疑問とみた(S. 70. 以下引用頁は Gotschaleh の本書から行なう)。

さて、一九〇四〜五年のロシア革命を間にして SPD の方針論争は鋭化し、ドイツの労働者が合法的方法でユンカーの支配を打破しうるか否かの問題として、Massenstreik 論争がなされた。中央派は Massenstreik をはるか遠き終局戦とみ、Hilferding も当論争で中央派を支持した。彼はプロレタリアートの力が相対的に強いドイツではブルジョアとの闘争における最後の決定的手段として Massenstreik を考えながら、オーストリアではプロレタリアートの力が弱いからそれは個々の行動として適用されるというのだ。この考えは、SPD の「封建制及び絶対主義の残滓国では、まずブルジョア民主主義革命を完成して労働者の生活を改善することだ」とする理論と結びついている。そして、労働運動及び組織が強まれば、単なる利害代表でも労働者の思考・行動に影響を及ぼし現実に純粹に改良の見地が強まり労働運動は資本主義に適合させられるという。

この労働運動把握をみただけでも、Gotschaleh の如く方針論争の際の Hilferding の業績をドイツ帝国の社会的関係を適

切に分析した点 (S. 85) に求めるのは誤りであろう。

Gotschalch は進んで『金融資本論』における帝國主義の問題を取扱い、諸党派の中で Hilferding の独自の帝國主義論を紹介検討する。『金融資本論』を解説する中で著者は Hilferding が社会の経済的構造の変化との関連で事態を把握していたこと、その視点は一九三〇年代まで基本的に無変化であることを強調する。著者は Hilferding が今日の人々の誤った二つの伝説 (経営者支配が所有者の手から所有の統制を除去されること、株式制度を資本主義の民主主義化の手段として讚美すること) (S. 100) を否定し、株式制度が所有の統治機能の廃止でもその民主主義化でもないことを証明したのを彼の長所とし、周知の金融資本概念の検討へ移る。Gotschalch は専ら Grossmann・Sweezy 流の金融資本規定に依拠し、『金融資本論』時点以降に銀行の援助を受けない産業企業の増大及び自己金融現象を把えて Hilferding の規定の一般的妥当性を拒絶する。だが他方では Hilferding の提示した事実を見すごすことはできぬと云う (S. 107)。Gotschalch が金融資本の意義についての Hilferding の誤りは、流通部分や内部での過程に注意を向けて生産過程内部の諸変化を等閑視し、組織的法律的集中の視点からのために資本集中の決定的運動の基礎を見失い、株式会社の発展の結果、企業者の集中が所有の集中よりも急速に進むことを強調しすぎた点にある (S. 106) と結論する時、著者は金融資本の概念規定をめぐる論争をとれほど消化しているのだろうか。問題は Hilferding の独占概念の把握をどうみ

るかである。産業資本から銀行資本が分岐する道筋、銀行資本の自立的運動、そしてこの両者の運動を総括する資本の実体 (Kaufkraft, Finanzkraft) というプロセスの中で独占の生成・発展をどう導入するかである。

次に金融資本の経済政策を押し進める主体のイデオロギーが、古い自由主義的思考を克服して Nationalism, Rassismus, Militarismus へ志向する点を分析し、金融資本時代の階級関係へ及ぼす。Gotschalch は Hilferding の階級関係の分析に称賛を禁じえず (S. 131)。特に新しく発生した中間層 (Angestell-ten) の階級基盤の二重性格に着目しながら、他方で著者は今日では経済の構造変化が労働者と Angestellten との間に経済的区別はできず社会的地位に対する一つのラッセルにすぎず、Angestellten が自己の帝國主義的性質を改めて労働者の側に立って労働運動と結びつくという Hilferding の期待が空しいものであることを示す。だが新中間層をも運動の中に投入される理論と政策は何かが問題なのに著者は述べていない。

最後に著者は、帝國主義概念を非マルクス主義的帝國主義論とマルクス主義帝國主義論に分けて検討する。その中で彼は Lenin の労働貴族化理論の非現実性を説き修正を加える (S. 134, S. 147)。彼は労働組合の力が労働者の政治闘争にとって重要条件たることを Lenin よりも Hilferding が深察しているとみながら、両者共に資本主義の将来の展望を誤った、つまり彼等は政治的崩壊を差し迫ったものとみたという。そして彼の帝國主義観が示される——帝國主義的政策は Lenin, Hilf-

ering が考えたように「独占資本主義」(その段階では少数の大企業とカルテルによって経済現象への処理能力が集中され、より小さな企業は大なり小なり水平的・垂直的に大企業に依存する)の発展の結果だろうが、「独占資本主義」は既にその拡張の可能性の限界に達しているとは考えないし資本主義的発展は帝国主義の時期をより長つづきさせ「世界資本主義の没落」はなお長い間待たれる (SS. 147-148)と。ここに我々は Hilferding 理論の再現を見る。著者の理論的帰結は期待待ちの資本主義の自動延長論である。この誤謬の根底は帝国主義を一つの経済政策とみ、金融資本の実体把握を欠いている点にある。

#### 四 Hilferding の理論的活動の第二段階

SPD. は戦争債問題に端を発して一九一五年一二月に三グループに分裂。Hilferding は Kautsky と共に独立党に所属。一九一八・一九年の革命及びソビエト一〇月革命以後、革命の目標に関する闘争において議会民主主義とソビエト民主主義 (Räte-demokratie) との結びつきに努力した独立社会民主党に属し、「ソビエト体制が民主主義ではなく、ソビエト体制と民主主義」のスローガンを固く信じた。彼は民主主義を単なる多数の支配と同一視していた。

カイザー帝国の崩壊がドイツ国民層間に資本主義秩序の崩壊と感ぜられ社会化の噂が立ち、現実には社会主義諸党は社会化の概念を廻って対立したが社会の社会経済的基礎の変革は一気に

達成不可能という点では同意見であった (S. 168)。Hilferding は独立社会党の理論 (資本主義的企業社会の即時開始) を支持し社会化の段階が来たとみた。石炭鉱山業の社会化委員会は一九一九年二月一五日多数派 (自由競争への復帰を否定、労働者の抵抗で自由な資本主義経済は破滅、Kohlenrat を指導機関) と少数派 (私的所有原理の固執、私的資本家のイニシヤティブは経済の指導力にとって必然的、Kohlenrat を統治機関) の意見を發表し翌年七月二日 Lederer 提案 (第一回委員会の多数派提案) と Rathenau 提案が報告。Hilferding は前者に与す。

Hilferding は資本主義の枠内での生産の改善でなくて労働者の為に政治的力関係を変化させる社会主義的経済秩序によって労働者を保証することを望む。彼は社会主義を一つの権力問題と考え、社会化の条件は、それが生産上昇をもたらすのでなければならぬとみる。だからまず基幹産業 (石炭・鉄・電気) の社会化が力説されるが、農業の社会化は消極的にしか言及されず、土地改革の無理解の結果、農業では特別の農業政策、組合制度の促進によって社会化又は中立化させると考え大土地所有の農民への分配を技術的後退だとして退けている (SS. 178-179)。かくの如き彼の社会化の問題は全く現実的であった (S. 179) だろうか。そこには現時の特に先進資本主義国の社会主義社会への発展の可能性とその条件及び方法に関して政策的に顧慮さるべき点もあろうが、彼の中には社会化への技術主義的傾向、使用価値の増加を第一とする生産力中心主義的思想がみえ

ている。この意味では著者が言うように Hilferding は問題をあまりに形式的に、あまりに非政治的に考えたのだ (S. 179)。ところで未完成革命の終了がドイツにおける革命的社会主義の終了だとみた Hilferding は組織された資本主義論を立てて SPD と USPD を再統一後も党の多数派を獲得し、相対的安定期後もその理論は SPD の方向を規定する羅針盤となる。

組織された資本主義論の発端は『金融資本論』のジュネラル・カルテル論に、用語の発端的表現は一九一五年の『Der Kampf』誌にあり、金融資本は無政府的資本主義的な経済秩序から組織された資本主義的秩序への転化の萌芽を含むと言われる。この理論の背後には、社会主義は議会主義的方法で達成され、国家権力は階級闘争において中立的であるとする思想が隠されている。労働者階級が資本主義的に hierarchisch に組織された経済に満足するか、生産の民主主義的社会的組織を要求するか決定を下す必要があるという。もし組織された資本主義を選べば、そこでは自由競争の資本主義の無政府性に代って生産手段所有層のために経済の意識された秩序と指導が入り込み、新しい政策によって大トラストによる投資の計画的配分、好況期への投資の移転、大銀行による適合的な信用規制が中央銀行の貨幣政策に支持され、失業の危険が減少する (S. 191)。この理論は一九二七年キールの党大会報告で更に明確化された。Hilferding は生産者の多数によって経済の意識的に社会的な規制として経済民主主義を理解し、その必然的前提は生産者の心理的変革であり、教育学の問題が社会的改革にとって根本

的な意義を有すると主張する。ここに我々は、経済の問題をその経済を動かす人間更には人間の心理迄下った限界効用学派の価値論を想起する。人間対自然の質料変換過程において人間はなまの人間ではなく第二の自然たる社会の中に、従って社会の制度に縛りつけられる。価値関係に支配されている人間を Hilferding は見ていない。彼は又ここで、経済現象を貨幣という物指で測定する。測定器は変動しないのが望ましい。だから貨幣価値を安定させる経済政策を目標とする。信用重視視点もここに発する。

この組織された資本主義の外交政策が Hilferding の「現実的平和主義」(realistischer Pazifismus)であるがその中味は現実的な反軍国主義の政策であり、具体的には国際連盟、労働者党の力強さ、Völkerverbund の必要さを説いたものである。だが Hilferding は著者の言うように、この政策の主体たる金融資本が一つの資本主義国の内部で独占的競争へ志向し、その国家的平面での資本主義の組織も個々の国間の競争を鋭化させる (S. 201) 点を見すべし。

##### 五 Hilferding の理論的活動の第三段階

一九二八年四月の選挙で多くの労働者は SPD が現存秩序の枠内で彼等の日々の利害を保証してくれるよう賛成票を投じた。逼り来る世界恐慌下に彼等と中間層は不満をあの恐るべき反資本主義的世論と反民主主義的世論の宿命的結合へと向けた。それでもなお SPD は国会でナチスに対する防禦闘争を継続した

が、遂に一九三三年六月二日 Hitler 政府により最終的に禁止された。ナチスの迫害から逃れえた SPD 指導者は Pass に結集した。そこでの社民党の亡命者グループは三分される。

(1) プラークの党指導グループ (Sopade と呼ばれその目標は社民民主主義)、(2) 革命的社会主義者のグループ、(3) :*Neu Be-sinnen* グループ。Hilferding の立場は中間派で各グループの橋渡しの役を担った。一九三四年一月彼の起草になる「プラグ宣言」が発表され、彼は改良主義から分離した。

この宣言の内容は紙面が無いので前掲今野論文を見られたい。Gottschalch によれば、この宣言は唯一の社民民主党的革命綱領であるが故に重要であり、国民社会主義の勝利の諸条件下にマルクス主義の諸理論を政治的实践にとっての諸指針として適用しようと試みている (S. 232)。だが労働者と中間層の同盟は宣言には言われていても、プロレタリア独裁の規定は入っていない、外交政策の部分でも欠点があった。この宣言が現実性たりうるかどうかは国民社会主義ドイツが孤立したままであるかどうかにかかわらず、その事実はそうでなかった。イギリスとフランス双方がドイツの再軍備を黙認したことが国民社会主義者に戦争へと走らせた原因であると著者は言う。更に彼によると、この宣言の作成過程から Hilferding は二つの教訓を引き出したとみる。一つは労働者階級の革命的運動が単なる賃上げ運動に終らなければ、十分に訓練を受けた非合法闘争で鍛えられた幹部による厳格な指導が必要だし、二つは革命の結果が自由主義的民主主義でなく社会主義的民主主義であれば、社民党の伝

統たる「まず第一に民主主義の獲得、その後その基礎上で社会主義への闘争」の歴史的順序は打破されねばならない。反国民社会主義闘争が資本主義的秩序に対する闘争と直接結びつけられねばならない (Ss. 237-238) と。この Hilferding の統一戦線理論においては農民が欠落している。又労働同盟との関連も述べられていない。著者も注目していないがその理由はどこにあるのか。前の社会化の問題と同様に、農業は Hilferding にとってアキレス腱であった。

なお晩年の Hilferding は、ファシズムとボルシェビズムの苦い経験から当時の「全体」国家の解明を行なう。R. L. Worrall が国家によって資本が蓄積されるのだからソビエト連邦でも国家資本主義が支配していると言うのに対して、Hilferding は資本蓄積は利潤が生産される生産手段の蓄積であるが、ソビエト連邦では交換価値ではなくて使用価値が蓄積されるであり、そこでは資本蓄積が「生産の管理者」の課題である (S. 243) と述べ、進んでソビエトの経済体制を全体主義国家経済と考え、そこでは経済の性質が政治を規定するのではなくむしろ政治によって規定されるとみる。彼の認識の出発点は、権力 (Gewalt) が決定的であるとする点にある。権力→政治→経済。ところが彼によると、権力は盲目であるから歴史における合法則性の認識は限界にぶつかると。そこで「必然性」を Marx の意味ではなくて、Max Weber の意味で「機会」(Chancen) と解すべし (Ss. 244-245) と。我々はこのに彼が歴史における権力の役割の過大評価ならびに歴史の推進体たる生きた人間

の不在をみる。Marx の歴史観は Hilferding によって社会学の歴史観となる。又彼は社会的現象を二つの分配——①国家の「直接的命令権」に隷属した分野と②この直接的な国家の規制の外に留まって、国家の命令によっては扱えられず、この意味では固有な自律的な諸法則（例えば経済のような）を土台としている分野——に区別しているのだが、経済法則が固有な法則として発現する分野に国家権力が介入する根拠は、ここでは前の定式化と異なって全然ないわけである。あるいは自律的な運動を行なう経済過程へ何らかの偶然的要素の作用により、介入すべくもなかった国家権力が入り込む時はじめて国家権力の侵入による経済過程の変動が法則化されるとみるのであろうか。この場合には法則は偶然的、一時的となるであろう。彼の歴史法則理解は混乱している。更に彼は、Marx の二階級分類を経済的には正当だが社会的には不十分だとして社会学的に修正する。遂に Hilferding は、Marx の歴史観及び二階級理論の修正を完了した。

#### 六 おわりに

上に見た Gottschach の新研究はやはり優れて政治学的なア

ローチであった。が逆に政治的活動の中で人間 Hilferding が生き生きと描き出された。Hilferding は絶えず現実を直視し、現実と対座し、現実との緊張関係の中で思考を深化させていった。安易な現実との妥協の産物としての理論体系では断じてないことを知らされるのである。ナチスに追われてもなお、Richard Kern という匿名で第三帝国の経済状態を究明している事実を人は何と考えたらよいか。だがそれにもかかわらず、彼の理論と現実との間にギャップが生じた理由は何か。それは、彼が具体的事実を理論化する際に用いた独自の方法に基づくものであるとするならば、彼と Mach 及び Weber との思想的哲学的アプローチが必要であらうし、既述の如く、オーストリア・マルクス主義との連関も問われるべきである。ただその際、Hilferding がドイツを問題にしている背後に、常にオーストリアの問題を考えていることを注目すべきではないかと思う。

と角、Gottschach の研究によって Hilferding 研究の一段の発展の契機が与えられたことは確かであろう。なお本書巻末の Hilferding 著作目録及び参考文献は Hilferding 研究にとって見すごすことのできぬものであることを付記しておこう。

(一九六八年二月五日) (一橋大学大学院学生)